【実践報告 1】自立と体験 1

明星大学通信教育課程教育学部教育学科における、「自立と体験 1」の実践報告

榎　本　達　彦※

はじめに

2010 年度 4 月より筆者が担当してきた、明星大学通信教育課程教育学部教育学科における、「自立と体験 1」の実践について報告する。明星大学では、2010 年 4 月より全学共通科目として、「自立と体験 1」を設置した。当科目は明星大学に入学した全ての学生が入学年次に履修する科目である。明星大学通学課程における「自立と体験 1」については 2010 年度明星大学紀要に報告されている。

当論文では、2010 年 7 月に行った通信教育課程での「自立と体験 1」の最初の授業から 2011 年 12 月に行った授業までの全 7 回の授業を振り返りながら、通信教育課程における「自立と体験 1」の意味、問題を考察するものである。全体は、1）最初に通信教育課程における「自立と体験 1」の概要を説明、2）通信教育課程の特性に合わせての「自立と体験 1」の実際の内容、実際の授業の様子、3）考察；授業を終えて、4）全体のまとめと今後の課題、という流れになる。

尚、以下特別の記載のない限り、「自立と体験 1」は通信教育課程における「自立と体験 1」のことを指す。また、通学の学生対象の場合は「通学課程」という表記をすることとする。

1.「自立と体験 1」の概要

「自立と体験 1」の授業概要と教育目標は、「この授業の教育目標は、『明星大学に学ぶ学生としての自分を理解し、各自の理想や目的を明確にしていくこと』です。授業は講義形式ではなく、協働学習が中心となり、教わるのではなく、学生自ら感じ、考え、気づき、学ぶことを重視します。授業の主体は学生であり、教師は学生の学習活動をサポートするファシリテーターとして位置づきます。積極的な参加が必要です。」となっている。これは、前半が教育目標であり、後半が授業概要となっている。

教育目標の意味は、大学に入ってきた学生が大学で学ぶための基本的な姿勢や学生生活を成り立たせるためのきっかけを習得し、社会に出て行く自分の方向性を考えることである。特に、通信教育課程の学生は日常的な学びは一人で進めていくわけであるから、学ぶ自覚と意識を明確に持つことが大事になる。

また、授業概要の項目では、通学課程も含めた「自立と体験 1」の特色である協働学習と協働学習を通して自らが学んでいくことの重要性に触れている。これまでの小・中・高校では、「教員から教えてもらう」という学習方法が中心であったが、大学においては学生自らが自覚をもって学ぶという学習方法が中心になることを理解すると共に、明星大学においては実践的に体験を通しての気づき、学びを体験することに重点を置いていることを理解する。

「自立と体験 1」ではこのように、学生が大学において生活し学ぶにあたっての前提をその教育目標としている。

2. 通信教育課程の特性に合わせての「自立と体験 1」の実際の内容

もともと「自立と体験 1」は通学課程の学生を想定してその具体的内容が作られてきた。したがって、通信教育課

※ 人文学部特任准教授　明星教育センター

程で「自立と体験 1」を実施するにあたっては、その特性に合わせて修正する必要があると筆者は考えた。理念的・原理的にもとの考えを踏襲しつつ、よりよい授業を作っていくためには、また当該学生に適正な内容とするためには、いくつかの改訂が必要となった。

1）通信教育課程の特性

①単一学部学科―教員養成課程と教育学

通信教育課程の特性を、通学課程との比較で考えていくと、一つは通信教育課程が教育学部教育学科の単一学部ということである。受講コースということで見ると、小学校教員コース、教科専門コース、特別支援教員コース、子ども臨床コース、教育学コースと 5 つのコースに分かれる。であるからして、全ての学生が「教育」をその専門としていることは間違いない。ただ、必ずしも全員が教員志望である訳ではなく、心理学を学び心理学方面の専門家になる事をめざしたり、教育学を学ぶことで大卒資格を取得しようという学生もいる。上記コースでいうと、子ども臨床コースと教育学コースの多くが教員をめざさない学生である。

ちなみに、一度大学を卒業し、改めて明星大学通信学部で教員免許を取得しようという学生は編入となるので、「自立と体験 1」の受講対象者ではない。

②社会的経験、年齢層の幅

通信教育課程の学生は社会経験、年齢層でみると、次のように分けられる。A）高校を卒業して入学してきた者（浪人を含む）、B）一度社会にでて仕事などをして入学してきた者、である。A）の学生は、ほぼ通学課程の学生と同じである。筆者の沖縄のクラスを除く 5 つのクラスでは、そのような学生はクラスの 2 割程である。年齢も多くは 20 才以下である。B）の学生は多様である。多くは仕事をしているが、教育関係の仕事か教育には直接関係ない仕事、既婚者と未婚者、子どもがいる・いないなどである。また、年齢的にも幅がある。筆者が受け持った学生での最高齢は 49 才であったが、平均的には 20 代半ばから 30 代半ばが多い。

③沖縄クラスについて

沖縄については別に章を立てて述べるが、沖縄のクラスの学生は多くが A）の学生である。B）の学生は東京でのスクーリングのクラスとは逆に全体の 1 ～ 2 割である。沖縄の場合は、沖縄の教員養成専門学校の育英義塾 [※1] と提携しているため、このような状況となっている。

2）通信教育課程の特性と授業内容

「自立と体験 1」はシラバス（表 1）の授業計画にある内容で進むが、具体的内容、教案、資料等は上記の通信教育課程の特性を考慮しながら作成した。ここでは、授業計画の流れに沿って説明をしていく。

表 1　通信教育部「自立と体験 1」授業計画

第 1 回	オリエンテーション、グループ分け
第 2 回	チームビルディング 1
第 3 回	チームビルディング 2
第 4 回	自己表現 1
第 5 回	自校教育
第 6 回	レポートの書き方を学ぶ 1
第 7 回	レポートの書き方を学ぶ 2
第 8 回	自己表現 2
第 9 回	キャリアデザイン 1
第 10 回	キャリアデザイン 2
第 11 回	キャリアデザイン 3
第 12 回	総まとめ、自分の大学生活を描く

※1　育英義塾ホームページ URL;http://ikueigijuku.com/

第 1 回　オリエンテーション、グループ分け

オリエンテーションでは、この授業がどういうものなのかを伝える。「教育心理」とか「物流論」とか「基礎解析」とかは 1 年生にとって始めて聞く名称だとしても、これは一般的な学問分野であるから、イメージが湧きやすいし、調べれば分かるものである。しかし、「自立と体験 1」は明星大学独自の授業であるから、科目名を見てもその内容については、分らないので、丁寧に説明している。そのポイントは、①初年次教育であることおよび初年次教育の意味、②明星大学および明星学苑の教育理念との関係、③協働学習および討議を中心とし多用する授業であること、③積極的な参加と自分自身で考えることを重視すること、④全員が教育学部であるから教育をトピックやテーマにすることである。

①初年次教育の意味については、少子化の流れの中で大学生活や大学での学びに適応できない学生の数が無視できない数になったこと、そのことにより大学本来の機能が発揮できないこと、これらの状況を鑑み入学初期に行う大学生活や大学での学習へのガイド的授業である。

②では、明星大学では 2006 年度から「自立と体験」という形で、初年次教育を行なっていたこと、その中で特に、授業名にもある体験教育を大事にしてきたこと、などを説明している。[※2)]

③「自立と体験 1」の授業の特色のひとつは協働学習である。教師が教壇の上から学生に知識を付与したり、講読したりという授業ではなく、グループワークを多用する事を伝えている。もう一つ、これは特に通信教育課程「自立と体験 1」に特徴的なことであるが、討議を多用することを伝えている。

討議を多用することの意味は 2 つある。一つは、先程も通信教育課程の特徴の箇所で述べたが、普段学生たちは一人で勉強しているので、このスクーリング期間はなるべく学生同士が交流する機会を増やしたいと考えている。他の学生がどういう意識で勉強しているのか、どんなことを考えているのかというようなことを、この機会に知ることが出来たら良いと考えてのことである。単に、友達をつくる機会を提供するだけでなく、スクーリングの間、チームで学ぶ事、考える事を体験させたいという意図である。

また、学生たちの多くが社会人経験を持っていることで、問題意識が高く、知識も多い。また、多くの学生が自ら大学に来ることを決め、学ぶ自覚を持って入学して来ていることでもある。したがって、討議のレベルも比較的高く、討議を通して学び合う楽しむ傾向が強いのである。筆者は後述するが、2010 年夏のスクーリングの授業でこのことを体験して、その後の授業では討議を多様するようになった。

自ら考える、ということについても、社会人経験や子育て経験など社会的な視点を持っている学生が多く、自分の価値観、考え方を持っているので討議が討議として成り立つ場面が多かったのが印象的だった。

④通学課程の「自立と体験 1」は学部学科横断クラス編成が一つの特色となっているが、通信教育課程は教育学部教育学科の 1 学部 1 学科で構成されているため、学部横断クラス編成とはならない。そこで、この授業では、全てではないが教育の話題やテーマを使うことが多くなってきている。初期は学生の関心を考えて、特に強く意図したわけではなかったが、2011 年度からは、後述するように、12 回の授業の最後は「私の教育論」という発表にしており、途中のテーマも教育に関するものを増やしている。この件は他の項目で詳しく述べるつもりである。

第 2 回・第 3 回　チームビルディング

通信教育課程の「自立と体験 1」は集中講義となっていて、12 回を 3 日で行うタームと 4 日で行うタームがある。4 日で行う場合は 1 日 3 回の授業を行うので、第 3 回が第 1 日目の最終となる。学生たちは先に書いたように、普段 1 人で勉強しているし、スクーリングのシステム上この授業のクラスも普段会わない人、知らない人も多いことにな

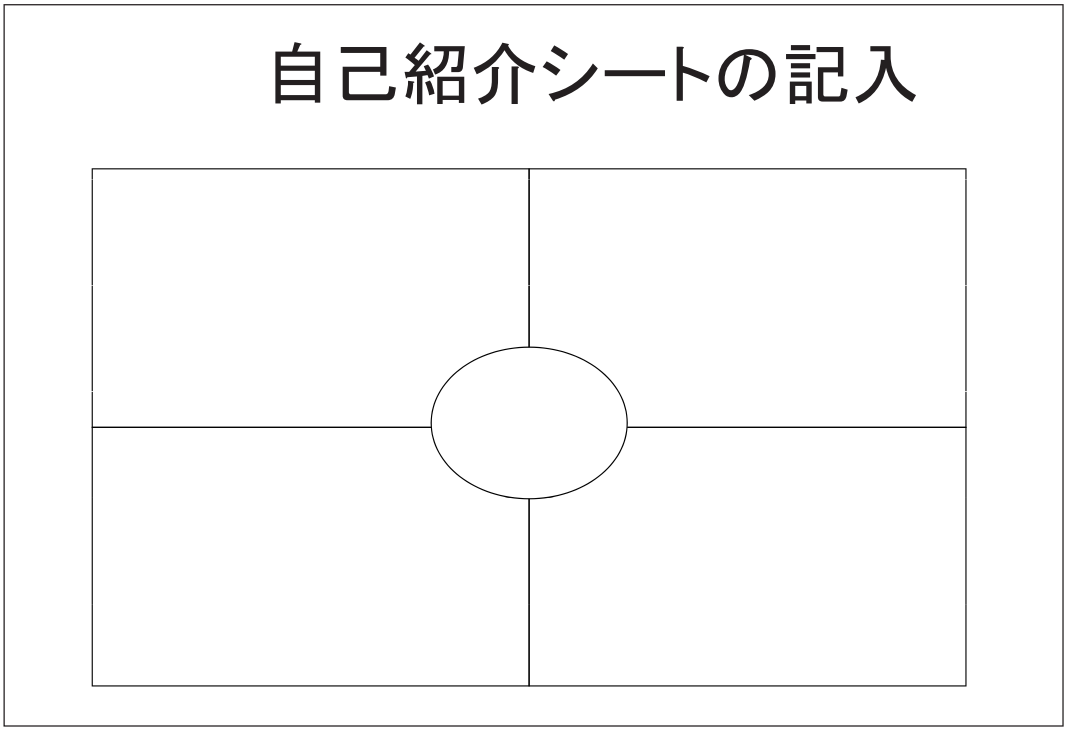
[※2)] 明星大学の初年次教育については、明星大学明星教育センター紀要　榎本、鈴木、山田 2011 年 3 月発刊参照

る。一方、授業の多くは協働学習、グループワークが中心となる。そこで、「自立と体験1」ではグループを形成したあとのチームビルディング（チームワーク作り）に時間をかけている。

具体的には、①「自己紹介」、②「1対1対話」、③グループ形成を意図したチームアークゲーム、を行なっている。①「自己紹介」は、通学課程の「自立と体験1」で行なっているものと基本的には同じである。自己紹介シート（図1参照）に記入し、それを提示しながら自己紹介をする。ここでは、自己紹介の内容をシートに書くことにより、学生が自己紹介をしやすくしている。

全員が自己紹介をした後は5分程フリートークタイムをとって、メンバーの交流を図っている。

図１　自己紹介シート



②「1対1対話」はa）12のテーマを書いたシートを配る（表2）、b）グループ内でペアをつくり、そのペアで12の中からひとつのテーマを選ぶ、c）そのテーマについて2人で話をする、d）時間は1人4分×2名で1ペア8分づつ、e）1ペアが終わったら、ペアとテーマを替えて同じことをする、f）そうして、グループ全員と8分ずつ話をする。

①の自己紹介はグループのメンバーについて広く浅く知ることを意図しており、②では全メンバーの意側面を深く語り合い、知ることとなる。

③これまで行なった授業では、ここまで来ると大体グループは形成される。そこで、今度はグループのチームワークを発揮しながら、さらにチームワークを高めるために、グループで協働して行うゲームをする。このようなゲームは数種類用意しているが、一つのゲーム群はカードゲームで、25枚のカードに様々な情報が分散して書かれており、その情報を口頭でグループに伝えながら、カードの一枚に書かれている課題をクリアするというものである。もう一つのゲーム群は、まず個人個人である問

表２　１対１対話シート

1）子供時代に見たテレビ番組
2）子供時代にした遊び
3）小学校、中学校時代の友人
4）修学旅行
5）学園祭
6）遠足
7）好きな科目
8）先生
9）家族
10）宝物
11）本
12）ヒーロー　あるいは　ヒロイン

題を行い、同じことを個人で行なった問題の回答を活用しながら、グループの回答を得るというものである。これは、チーム内メンバーの合意形成をするものである。

いずれのゲーム群ともに、メンバー間のコミュミニケーション、役割分担、問題発見・解決力、積極的な参加が必要になってくる。ここでは、正解にたどり着いたか、という結果のみならず、このようなプロセスでのチーム力、チームワークが重要になってくる。ゲーム終了後、学生たちは振り返りシートを書きながら、ゲームの進行のプロセスを実際に振りかり、どういうことが起こり、どういう意識で自分がいたか、ということを考えることになる。まさに、(ゲームという）グループ作業体験を通してチームワークやリーダーシップなどについて考え、気づくこととなる。また、その過程でチーム自体が団結力を強めていることとなる。

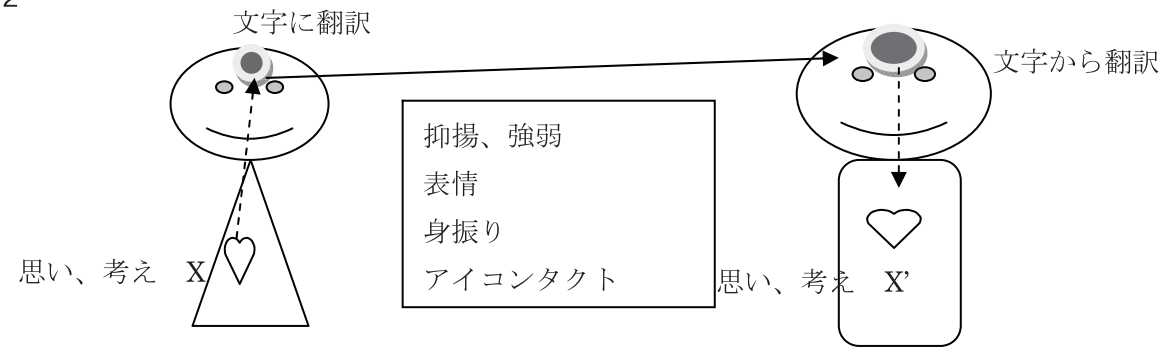
第 4 回　自己表現 1、第 8 回自己表現 2

自己表現の具体的な内容はコミュミニケーションである。第 4 回ではいくつかのワークを行いながら、コミュミニケーションとは何かを考え、自分たちなりの回答を出すことになる。こちら側でもコミュミニケーションについて伝えたいことは用意している。それは、①コミュニケーションにおける「聴く」ことの重要性、②「言う」のではなく「伝えること」、③コミュニケーションのスキルではなく、伝えたいコンテンツ内容の理解と伝えたいという意識の重要性である。

最初に行うワークは、ペアワークである。2 人で話をするのだが、話す側と聴く側を決め、1 回目は聴く側が相手の目を見ない、相づちも、頷きもしない、つまらなそうな顔をする。2 回目は普段通りあるいはそれ以上に相手の話を聴く姿勢で、しっかり聴く。その時の感じを話し手と聞き手がどう感じるか、を書かせたり、感想を述べ合ったりする。時間的には 1 回目は 1 分、2 回目は 2 分としてみても、感想の多くは 1 回目の方が長いと感じたりする。

ここでの要点は、コミュニケーションは言葉だけで成り立つのではなく、他にもいろいろな要素があること、話す側だけの問題ではなく聴く側、受け取る側の問題もあることに気づくことである。このようなコミュニケーションの構造が理解されると、その後のグループワークやグループ討議にも変化が出てくる。(図 2 参照)

図２



もう一つのワークは、書かれた図形を口頭でグループのメンバーに説明し、その図形を書かせるというものである(図 3、4)。言葉を使って、図やイメージ、考えや思いを伝えることの難しさを、このワークで体験してもらう。コミュニケーションは自動的なものではなく、しっかり考え、知識を動員して伝えるという事を学生たちは感じ、気づくようである。

図３

問1

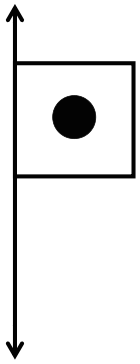
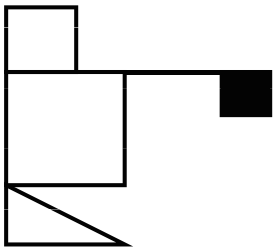


図４

問2



第 8 回では、直接的にコミュニケーションとはどういうことか、上手にコミュニケーションをするためにはどういうことが大事か、という事をグループごとに討議させる。初期には、ワークを使いながら考えさせてたが、回を進めるうちに、グループ討議という形でも十分進められると考え、2011 年度の授業から討議を取り入れている。第 4 回のワークから時間が経っているが、途中の授業内でもグループワークや討議が挟み込まれているので、それらの体験を振り返る形で討議をさせる。討議の結果をまとめ、討議の過程も含め、クラスで発表を行う。この時も、A3 用紙や模造紙でプレゼンシートを作成し、いかに伝えるかということを考えさせる。

第 5 回　自校教育

自校教育では、まず通学課程と同様明星教育センターで作成した DVD「母校を知る明星大学」[※3] を観て、その後小川哲生学長の講義がある。通信ではその後本館 4F の「明星大学歴史資料コーナー」（写真 1）に行き見学するという時間をとっている。

写真 1

その後、模造紙に「明星大学を自分の後輩に説明するためプレゼンテーションシート」を作成し、クラスで発表する。このワークにはかなりの時間を当てている。その理由は、通信教育課程の学生はスクーリング以外大学に来ることはほとんどないので、明星大学に対する思いがあまり高くないと思われる。そこで、明星大学についていろいろな資料を見、具体的に資料を作成することでより一層明星大学を知り、明星大学に対する思いが高まることを期待している。

グループによって明星大学紹介の切り口もいろいろで、そのグループの個性が出る。特にこういうものをという制限はせずに、学生たちが思い描き、調査したものを自由に表現させている。（写真 2、3、4、5 参照）

※3 明星大学明星教育センター研究紀要 2011 年 3 月発刊；榎本 35p 参照

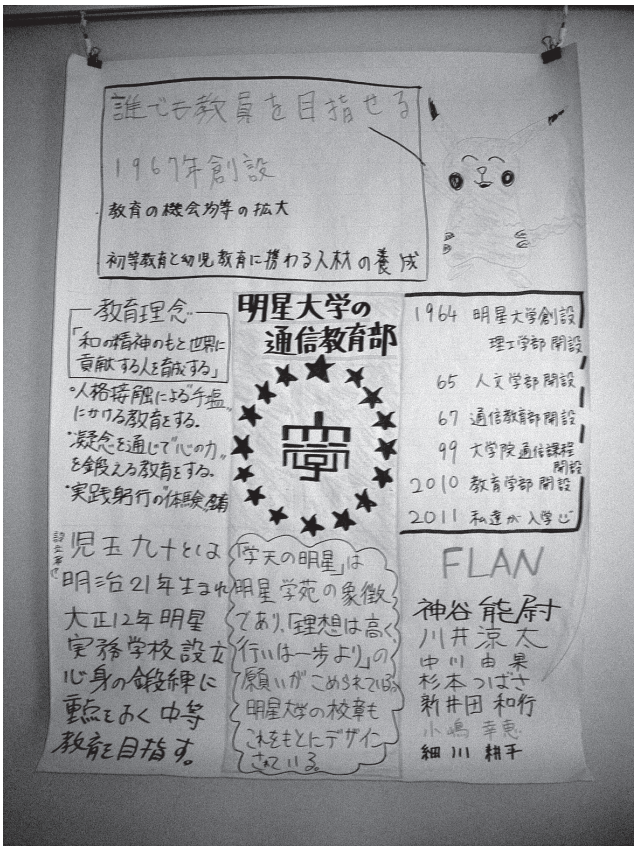


写真２

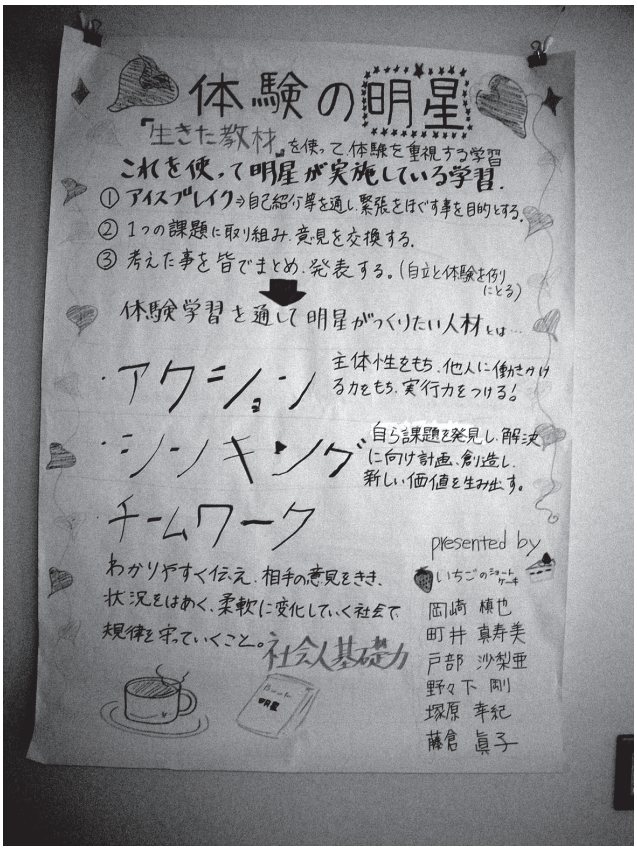


写真３

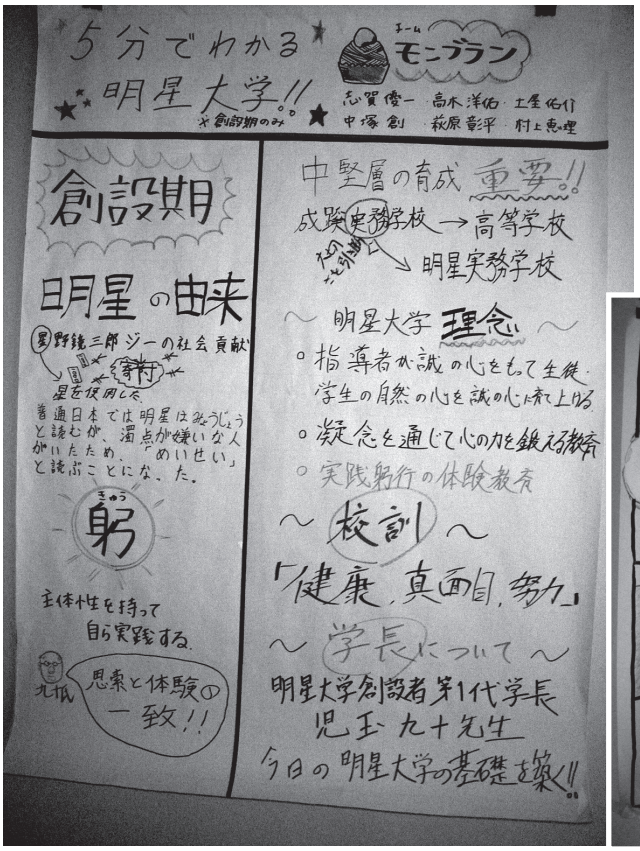


写真４

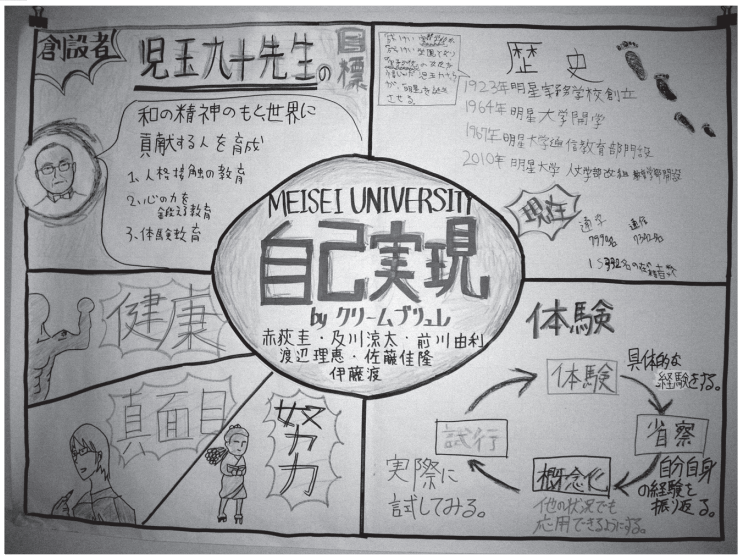


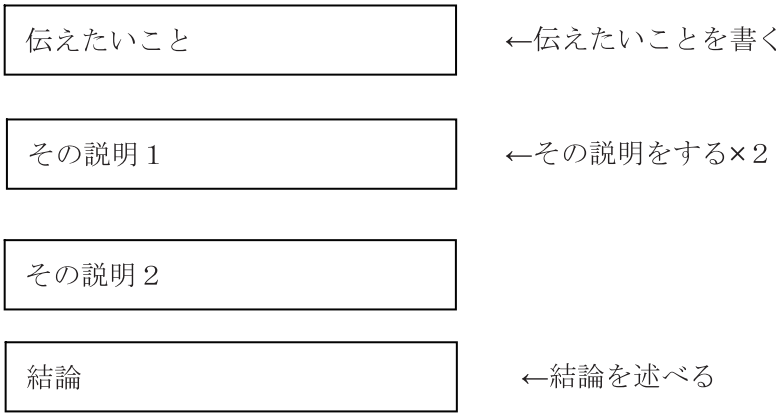
写真５

第 6 回・第 7 回　レポートの書き方

通信教育課程での授業はレポートの提出が中心となる。したがって、「自立と体験 1」でも「レポートの書き方」を 2 回行い、基本的な文章の書き方を学ぶ機会を作っている。第 4 回、第 8 回の自己表現で述べたのと同様、レポートを文章での自己表現と考え、分かりやすく伝わる文章をどう書くかに重点を置いている。自分の思いや考えを言葉にするのが口頭による自己表現だとすれば、それを文章に乗せるのが文字による自己表現ということになる。ということで、文法や構成、語句や漢字の知識も「分かりやすく伝える」ということを前提として位置づけている。

また、同時に大事なことは「伝える内容＝コンテンツ」である。「何を誰に伝えるか」がコミュニケーションの最大の目的であるとすれば、この「何を」が非常に重要になる。第 6 回の授業では、①伝えたい内容を明確にする（書き出す）、②それを説明する、③結論を述べる、という基本的な文章の構造を示し、最初は機械的に枠内に短文を入れこんでいく。（図 5）この構造の繰り返しで文章が出来る。

図５



ワークでは、①実際の文章をこの構造で分解していく、②「好きなもの」で思い描いた事や物をあげ、それを説明する文章を、この構造に当てはめてつくる、という作業をする。

次に、①あるテーマについてグループで 15 分ほどの討議をする、②討議の内容を報告する文 3 を各自書く、③書いたものをグループで回覧、④また、ペアで添削し合うというワークを行う。ここでは、同じ「会議」という体験をしても、人によって伝えるポイントが変わったり、表現が違ったりする。この差異と分かりやすさを体験するのがこのワークの意図である。分かりやすさ、分かりにくさを言葉で言われてもなかなか理解しずらいが、体験的に自分の感覚を基準にすると理解しやすい。

第 7 回では、実際に第 6 回の授業の内容をテーマにした報告文と自分の日々の生活の一部を切り取るようなテーマで文章を書かせ、グループやペアで読み合い、添削し合う。黒板に「分かりやすさ」と板書し、書いている間中このことを意識させるようにする。

第 9 回　キャリアデザイン 1

キャリアデザインの最初は、実際のキャリアデザインの前に、社会に対する関心を高めるワークと討議を入れている。クラスの様子を見て、動画を見せる場合と写真を使う場合とを使い分けている。通信教育課程の学生は、先に触れたように社会経験を持つ者が多いので、比較的社会性が高い。したがって、写真を使って社会への関心を高めるワークを行なっている。

今回は写真 6 を見せて、いくつかの質問を発して学生たちの考えを引き出してみた。この写真は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災および津波を受けた、福島第一原発事故後 4 月末頃に生まれたと言われているうさぎである。うさ

写真６

ぎの妊娠期間は約 31 日といういうことで、「福島の耳なしうさぎ」と言われ放射能汚染との関連を疑われた。しかし、確たる証拠はない。

ワークでは、①写真を見せる、②感想を書かせる、③上記の「福島の耳なしうさぎ」の話をする。この時、放射能汚染の確認はなく、ただ可能性は残っていることを強調。④もう一度感想を書かせる、⑤感想をグループで発表、⑥個人ワークで、放射能汚染の危険性と恐怖について書く、⑦グループで放射能の危険性と恐怖につして討議する、⑧討議の内容をまとめてクラスで発表、⑨その後、時間があればクラスの中で意見を言い合い、教師もそれに絡む。

この最後のワークは、学生の意識や知識が一定レベルに達していないと難しい。経験的に沖縄を除く通信教育課程のスクーリングの学生の多くはほぼこのレベルにあると思い、実施したが、夏・冬ともに議論は盛り上がった。

このワークでは、例えば放射能汚染に対する一定の事実や知識に基づいた判断をすることについて気づくことを期待している。「風説被害」の多くは事実や知識に根ざすことなくムードに流される場合が多い。教師として子どもの前に立つ彼らが、風説で話したり、行動することなく、事実を知り、判断の可能性を探る意識が大事になってくる。

第 10 回　キャリアデザイン 2

キャリアデザイン 2 では、「過去を振り返る」シートを使って自己分析を行う。就学前、小学校、中学校、高校時代の印象的な出来事を表に書き出す。① 10 ～ 15 分で各時代少なくとも 3 項目は書き出すように指示して書かせる、②書き出した中から一つだけ、最も印象的な出来事に赤丸を付けさせる、③それが最も印象的と考えた理由と、そのことの意味を書かせる、④ペアで赤マルをつけた事について話をする。

ペアでの話は 1 人が 7 分、ペアで 14 分となる。全員椅子から立ち上がり、周りのペアと間隔をとって、2 人の話に集中できるようにする。話し始める前は「7 分は長い」という声が学生から出てくることがあるが、実際に話してみるとあっという間だった、という意見が多い。自分にとって印象的で楽しい思い出だと、7 分くらいはすぐに立ってしまい、時間が足りなくなることが多い。

ここでは、過去を振り返り、自分がどういう人生をたどって来たのかを思い出す。また、その中でも最も印象的なことを決め、話すことで自分の人生にポジティブに対することになる。ペアでの話し合いは、時間がたつにつれ、話す方も聴く方も夢中になり、笑顔に満ちてくることがほとんどである。自分を表現することに快感を感じることが目的の一つでもある。

最後に 3 つの図（図 6、7、8）を見せながら過去の振り返り、自己分析について解説する。そこで学生たちに伝えたことは下記のとおりである。

図６

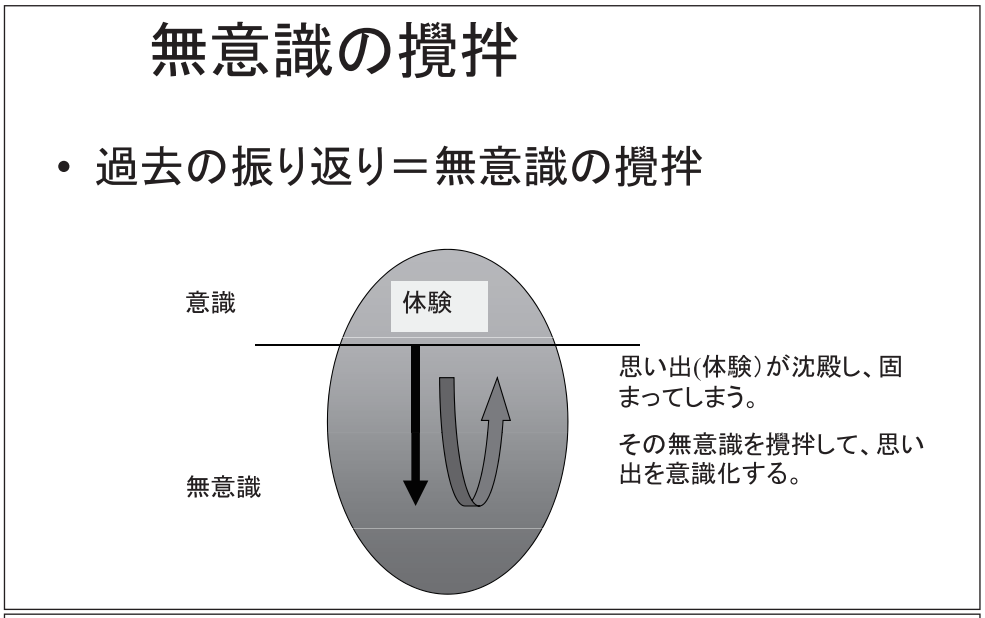

無意識の攪拌
• 過去の振り返り＝無意識の攪拌
意識
体験
無意識
思い出(体験）が沈殿し、固まってしまう。
その無意識を攪拌して、思い出を意識化する。

図７

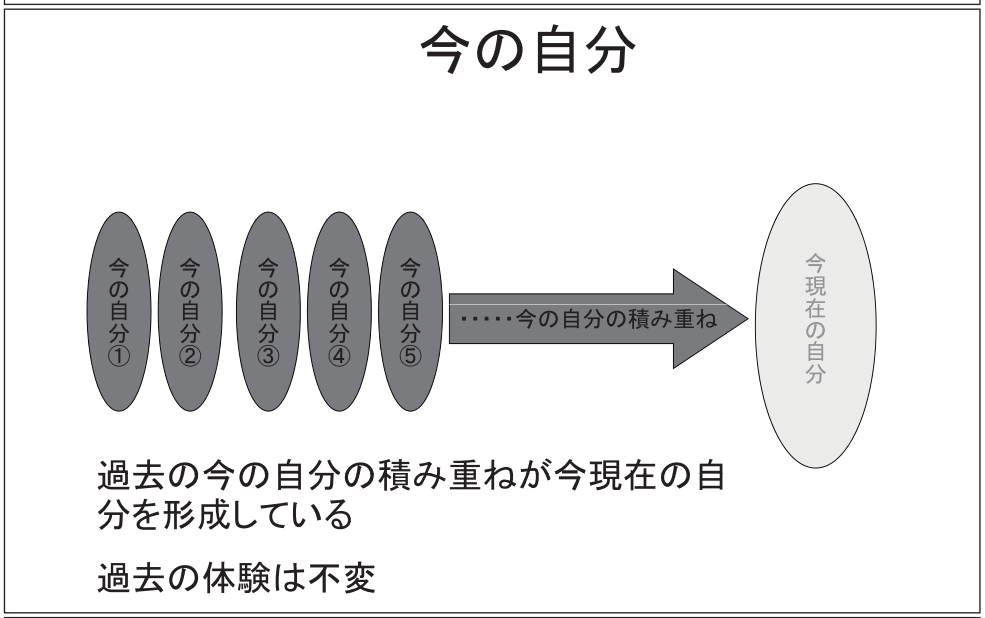
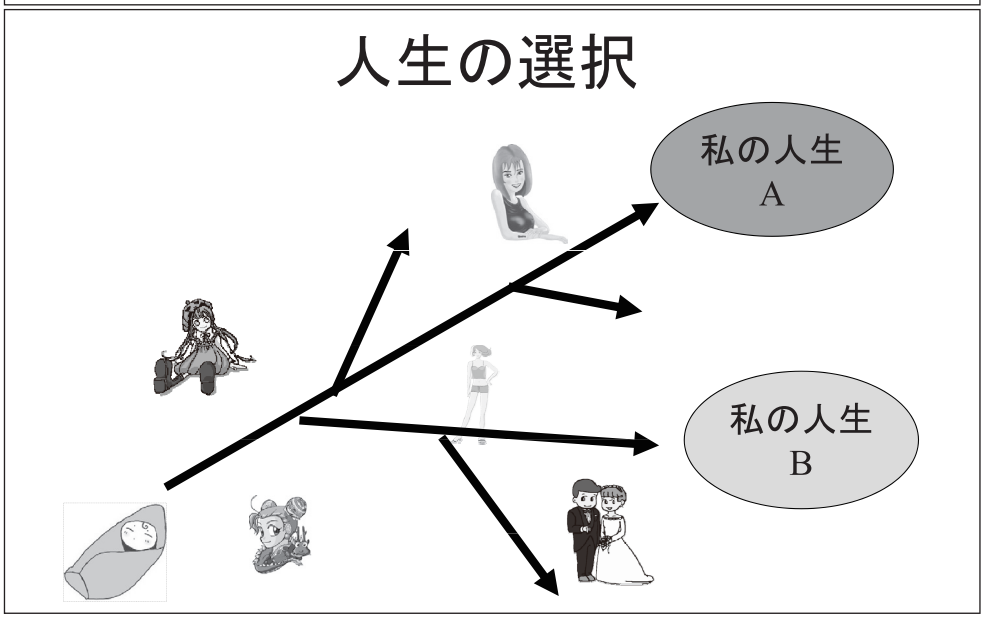

今の自分
今の自分①
今の自分②
今の自分③
今の自分④
今の自分⑤
・・・・・今の自分の積み重ね
今現在の自分
過去の今の自分の積み重ねが今現在の自分を形成している
過去の体験は不変

図８


人生の選択
私の人生
A
私の人生
B

1）今の自分は、生まれてから今日に至るまでの無数の体験の集合としてある
2）その過去の一つひとつの体験は消せない。しかし、その評価は変わる
3）今の自分を作っている過去の中に、自分にとっての宝物が埋まっている。さっきの赤丸はその一つである
4）一方で未来は、自分の意識で変えることができる
5）人は時々に選択をして生きている。今日の服選びから、職業選びまで様々な選択の連続である。
6）自分で選択をして生きている、ということは自分の人生を自分の判断で生きていることということ

以上のワークをすることで、過去に目を向ける準備が整い、次の回では自分の教育体験を振り返り、「私の教育論」へと進む。

第 11 回　キャリアデザイン 3

第 11 回は、自分の教育体験を振り返える。26 の問いを教師から口頭で学生に投げかけ、学生はそのことについて書いていく（表 3）。

書き終わった後、①子どもに何を伝えるか、②教育の大切さ、③教師になったらどういう教育をしたいかの 3 点を書かせる。それを、グループで共有し、討議をする。

そして、最後に「私の教育論」、教育とは何かをまとめ、A3 用紙にプレゼンテーションボードを書くあるいは描く。描き終わったら、ペアで 1 人分のプレゼンテーションの練習をする。

表３

1.	思い出の先生
2.	親友
3.	遊び
4.	運動会
5.	学園祭
6.	遠足
7.	部活
8.	試験
9.	教科書
10.	修学旅行
11.	けんか
12.	学んだ事
13.	悪さ
14.	恋愛
15.	親
16.	何故君は教師を目指すのか
17.	教師になってしたい事
18.	子供に何を伝えたいか
19.	理想の教師
20.	教師になる事への不安
21.	子供とどう接するか
22.	教育とは何か
23.	どういう子供を育成するか
24.	君が教室で大事にしたい事
25.	教育において一番大事な事は
26.	学校とは何か

第 12 回　発表とまとめ

前回の授業で作成したプレゼンボードを見せながら、全員が「私の教育論」を発表する。

発表後は 12 回の授業を振り返り、自由に小論文を書く。字数制限など無しに、自分の書きたいことを書く。

3. 考察

上記通信教育課程の授業を通して、明星大学の初年次教育およびキャリア教育をすすめるにあたって、参考になること等を記してみる。

1）授業を終えて感じたこと

「自立と体験 1」の授業を終えて思ったことは、学生のモチベーションあるいは授業に対する参加意識についてだった。元々、通信過程の学生、特に一度社会に出てから入学した学生は学ぶことに対してのモチベーションが高いことは想像できることであったし、実際授業をしてその事を強く感じて来た。

一方、彼らの学力が高いかということについては、きちんと調べた訳ではないので推測の域を出ないが、例えば通学過程の学生たちと比べてもそれ程差があるとは思えない。その推測の根拠は、もし学力がかなり高いとすると、高校卒業時に大学に進学している可能性が高いことになる。しかし、「自立と体験 1」を受講している社会人経験学生は大学に進学していないのだから、学力的には通学過程の学生と差異が少ない、場合によっては低い場合も少なくないであろうと推測されるのである。

しかしながら、例えば最初のチームビルディングで言うと、最初の自己紹介終了の段階で既にメンバーへの理解が深まっており、活発な話し合いがなされていたし、グループの中での役割も出来始めていた。自己紹介のワーク後、若干の時間フリートークの時間を入れているが、この時点でのグループ形成の度合いは通学過程の「自立と体験 1」と比べて明らかにより深まっている。

2011 年度は夏も冬も「原発問題」をテーマにグループ討議をしている。最後の「自立と体験 1」アンケートでその事について書いている学生の意見を見てみよう。

ある学生は、「印象に残った授業はありますか」という問いに対して、「原発の討論から、日本やアジア、アメリカの政治問題について。私が最も関心のある話題であり、自分の考えも伝えたくて仕方がない内容のテーマで討議できて嬉しい・・・(後略)。」と答えている。原発の討議については以下で取り上げるのでここでは割愛するが、原発問題から外交問題にまで話が進んでいることが分かる。筆者の経験では、これまでこれだけの討議をしたクラスは無い。全員が何処まで理解していたかは別としても、このテーマで討議が行われたことに着目したい。

では、学力に大差ないとして、何が違うのか。考えられるのは、社会人としての経験とあえて大学に来ることを自分で決定して来ているということではないか。それが、社会への関心や学ぶ意欲、モチベーションを高めていると考えられるのではないか。

もしこのことが言えるとしたら、このことをヒントに、明星大学の初年次教育やキャリア教育をより一層内容の深いものにすることが出来るのではないだろうか。

例えば、先日明星大学の通学過程の学生と話をした。彼は以前コンビニエンスストアでアルバイトをしていたが、今はある企業で社員と同じような仕事をするアルバイトをしている。勿論、社員と全く同じではないが、その企業の業務や営業、ビジネスの仕組み等、普通では得られない体験をしているということであった。実際には、インターンシップ以上の企業体験を彼はしていることになる。実際、その視点から自分の将来をかなり具体的に描き、しかもその事を明確に伝える力を得ているのである。

大学生が社会人の体験をすることは出来ないが、彼のような形でアルバイトをするならばそれはコンビニなどでアルバイトをするよりも社会性を育成することができるのかもしれない。ということで、このような企業でのアルバイトを斡旋するというのも、1 つの方法かもしれない。

また、通学過程の多くの学生は、明星大学を選択して来たという意識が薄い。勿論、第一志望を落ちて来た学生も多いだろうし、今は推薦に通るかどうかで、どの大学ということは関係なく入ってくる学生も増えているようである。しかし、実はそういう入り方をしたとしても、原理的には最終的に選択をして明星大学に入って来ている訳である。とすれば、自分が選択して明星大学に入って来た、ということにもう一度気づくきっかけを提示することもあり得るだろう。

これらのこと以外にも、学生の主体性、学ぶモチベーション、授業への参加意識を高める仕掛けやシステムはあるのではないか、その辺りを今後探って行きたい。

2）討議

最初にも述べたように、2011 年度の「自立と体験 1」では討議の機会を取り入れている。その最初のきっかけは、彼ら通信過程の学生は普段は 1 人で勉強しているのだから、スクーリングではなるべく学生同士が交流する機会を作った方がいいかな、というものであった。先ほどと同じ「印象に残った授業はありましたか」の回答で別の学生が「皆が自分の教育論を発表する授業（次項で詳しく述べる）。こういうモチベーションを高める授業は良いと思いました。孤独な通信教育なので・・・」という意見はまさに通信過程の学生のニーズにあったものであったことを示している。

授業では前出の「福島の耳なしうさぎ」の写真を見せ、なぜ放射能が危険で恐怖なのかという問いを最初に投げか

けた。それに対しての、学生の回答は「身体に影響がある」、「土地が汚染される」という抽象的なものであった。そこで、「ではどういう影響があるから危険あるいは恐怖なのか」という問い投げかける。そうするとより具体的に「癌になる」、「放射能が細胞を壊してしまう」という答が出てくる。このように、討議をするにあたって、事柄の定義やその本質に迫るということの重要性を彼らは認識し始める。

夏の時には、この問いに対して「将来障害児が生まれる」という回答があり、議論が白熱した。この時は筆者から「では障害児はいない方が良い、ということですか。とすると、今いる障害者は無用、ということになるね」という問いを投げかけた。子どもを持つ女性、独身の男性、10 代の学生、障害者施設で仕事をしている学生、特別支援学校の支援院をしている学生等様々な立場からこのテーマで議論がなされた。そして、「障害者観」、「障害者差別」、「優生思想」についてのかなり深い議論がなされ、それぞれに（筆者も含め）考えるきっかけを得た授業であった。その授業についての学生の感想である。

・「それぞれの意見を出して行くもので、否定ではなく批判をするものというのを学んだ（相手を否定しない）」
・「放射能からの優生思想。自分が優生思想を持っていると知り、とても悲しくなった」

3）自校教育

通学過程と同様、通信過程でも明星大学を知るという、自校教育を行った。通信過程の場合は明星大学のキャンパスに来るのはスクーリングの時だけなので、なおさら明星大学について知ることの意味は大きいと考えている。通学過程の「自立と体験 1」では、DVD「母校を知る　明星大学」という 8 分程のビデオを見て、そのあと「母校を知る　明星大学」というパワーポイント資料を見ながら、学長による講話を聞く。その後、模造紙に明星大学について学んだことをまとめてクラスで発表することになる。

通信の場合は、それに加えて、本館 4F の「明星大学歴史資料展示スペース」を訪問し、明星大学の歴史をさらに詳しく調べるという時間を取っている。それから、後輩に、自分の子どもにあるいは自分が教える子どもたちに明星大学を紹介することをイメージして模造紙にまとめることを指示する。それで出て来たのが p.79 の写真 2 ～ 5 である。

模造紙ワークを通して、学生たちは明星大学のある側面を深く知ることになる。実はその事が大学へのシンパシーに通じるし、ここで学ぶという意識、モチベーションにつながるものと考えている。自校教育の持つ意味は単に母校を知るということ以上の意味がある。

なお、沖縄における「自立と体験 1」では、提携している育英義塾（前出）との関係で、育英義塾の歴史にも触れており、現塾長の福本佳香先生に講義をしていただきました。沖縄の「自立と体験 1」を受けている学生は、まだスクーリングで明星大学に行っていない時期なので、明星大学はあまりリアルではないようである。しかし、育英義塾と明星大学の提携の歴史、育英義塾創立者の糸数昌直と明星大学第 2 代目学長児玉三夫の関係を知ることで明星大学への関心も高まったようである。

同時に、育英義塾が沖縄の教育界でなして来た、様々の業績は誇りとともに、教師になるために学ぶ意欲にもなっている。

4）「私の教育論」

「自立と体験 1」の最後の発表は「私の教育論」にしている。これは 2010 年 7 月の沖縄での最初の授業の時に始めて依頼ずっと継続している。学生たちの専攻は教育であるから、教師になる、ならないに関わらず、教育について学ぶことになる。その時に、まず自分のこれまで教育体験を振り返りながら、自分がどうして教育の勉強を始めたのか、どうして教師になろうとしたのか、どういう教育をしたいのか、ということを考えてもらいたいと考えたのである。

当然、彼らは教育学の勉強をして、著名な人たちの教育論を学ぶ。その時に、自分のリアルな教育体験から生み出

した、自分なりの教育の考えを持つことで、それらの理論がリアリティを持って理解できるのではないだろうか。そして、自分が教師になるためにこれから学び続けるモチベーションにもなってくる。

そして、もう 1 つ、自分の過去を振り返りながら、自分なりの教育論を創り上げて行く過程は、実は自分の価値観の掘り起こしにも通ずるのである。

実際この授業は多くの学生にとって印象的なようである。以下に、学生たちの感想、意見を記す。

・ 4 日間で多くのことを学びました。見ず知らずの人同士がグループになることが不安でしたがグループワークをすることでその不安も無くなりました。最後の発表もいろいろな人の教育への考え方があるんだなと実感したことや、人それぞれ感じ方が違うなと思いました。
・ 理想の教師について考える機会とたくさんの人の考えを知ることが出来ました。
・ 教育に対する様々な考え、意見が聞けてとても参考になりました。
・「自立と体験 1」を通して、いかに自分の中で目指すものや、～がしたいとかがブレているということに気づきました。（中略）周りの仲間の意識がとても高くこれでは（自分が）教育者としてマズイ！と発見させられました。でも、授業を終えて少しは自分の中の軸がみつけ出せたので、これを大切に大きく育てたいです。（後略）
・ スクーリングで今回の授業をするまでは、思ったより教育や大学生活に対する意識が高くなかった、と思える程、今回の授業は教育に携わるためのいいモチベーションになりました。
・ 自分の将来の先生像というのが、漠然としたものだが、感じることが出来た。

5）まとめと今後の課題

筆者の考える「初年次教育」は、「大学で○○を学ぶ」という意識の低いが学生が、自らの気づきによって、（納得していようが、いまいが）自分が入った大学で勉強をし、大学生活を送る、その意識モチベーションを作り上げることである。大学は教育機関であるのだから、大学では何らかの学びがあるべきだと思うし、その学びを持って自分の人生を歩むことが大事だと考えている。

このような「初年次教育」を作り上げるためのステップとして、この 2 年間の通信教育課程での「自立と体験 1」の授業を受け持ったことは筆者にとって多くを学ぶ機会となった。学ぶ意識、参加する意識が高まれば高まる程に高いレベルの学びがあることに気づいたことはその 1 つである。問題は、その意識の低いクラスでその意識をどう高めるかであるが、それは教師の側が力ずくで高められるものでは決してない。また、その時のクラスの意識を高めることと、継続的に学生がその意識を持って大学で学び続けることとは違う。自分の中では、これまでその時のクラスの意識を高めることで満足していたのではないかという反省がある。

心理学に根ざした教材やワークだけでなく、もっと根源的に人間と人間が対峙しながら、自分自身を考えて行くような仕方が必要なのではないかと思っている。ただ、それが実際どういうものなのか、曖昧模糊としている。ただ、一連の授業の中で行った「討議」という手法は 1 つのヒントになるのではないかと思っている。操作的に、外の力で自分の奥内に入り込むのではなく、自らの決意でそれをすることが重要なのかもしれない。

具体的な課題を提示する域に達していないのを自覚しているが、「自立と体験 1」を通して今後さらにその辺りを具体化し、明星大学、明星学苑の教育としての初年次教育、「自立と体験 1」を作ることを継続したいと考えている。

〔参考文献〕

『明星－明星大学明星教育センター研究紀要』第 1 号（2011 年 3 月）